



FEATURE#07 チクマ養蜂のトチ蜜



MOTOSU
HITO/MONO/KOTO

FEATURE#08 あおいけい



本巢市の
ヒト・モノ・コト

ヒト、モノ、コトが「良い街」をつくる。
生き生きと暮らすヒト、想いを込めてつくられたモノ、
新しくわくわくするコトをお届けします。

良い街 Vol.04 2024.3 発行 発行 = 本巢市役所 秘書広報課 〒501-1292 岐阜県本巢市文殊324 TEL = 0581-34-5040 編集・デザイン = 株式会社リトルクリエイティブセンター

もっと知りたい

〔本巢の魅力〕

-MOTOSU no MIRYOKU-

01 祝20周年! 記念PR動画「よろこびをつなぐ、未来につなげる」

動画はこちら >>



令和6年2月1日に市制施行20周年を迎えた本巢市では、これを記念してPR動画を制作しました。市のブランドコンセプト「暮らしを自給し、暮らすよろこびが持続するまち」とキャッチコピー「よろこび、そぞく自給持続」を表現した動画は、いわゆる奇をてらったものではなく、実に本巢市らしい、市民が主役の温かくて上品な内容に。動画は市公式YouTubeチャンネルで配信されていますので、ぜひご覧いただき、市が掲げる自給持続のイメージや、街の良さを感じ取ってみてください。

02 祝20周年! 樽見鉄道ラッピング車両「モトスマライ号」



市制施行20周年を記念し、市内を走るローカル鉄道「樽見鉄道」の新たなラッピング車両が誕生しました。その名も「モトスマライ号」。ネーミングとデザインは、市内にある岐阜高専と本巢松陽高校の学生たちがワークショップを通して制作しました。車体には「未来への希望をつなぐ」というコピーが大きく描かれ、内装も天井から壁面、床、吊り革など細部に至るまで、こだわり溢れるデザインが施されています。街の魅力と学生たちの想いが詰まった車両にぜひ乗車してみてください。

\\ いいもの、そろってます。 /

本巢市のふるさと納税

毎年、全国から多くの寄付が寄せられる本巢市のふるさと納税。食料品や日用品、木製品など、魅力的な返礼品がそろっています。

お米



岐阜を代表するブランド銘柄ハツシモなど、地元農家が丹精込めて生産したお米がラインナップ。能郷白山を水源とする清流根尾川を灌漑用水として、栄養たっぷりの耕地で育った美味しいお米をぜひご家庭で。

飛騨牛

言わずと知れた日本を代表するブランド牛。脂の融点が低く、やわらかい肉質もあって、まさに「口の中で溶ける」という表現がぴったり。まろやかなコクと甘みが口の中にサッと広がります。



詳細はこちらをご覧ください >

本巢市 ふるさと納税 >



数学 問題

VOL.04

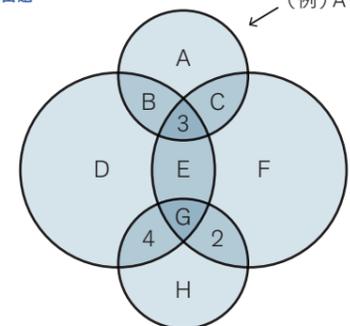
楽しみながら、考える力をUP↑

日本数学の父「高木貞治博士」の出身地にちなみ「数学のまちづくり」を進めている本巢市。数学の面白さに没り、楽しみながら「論理的な思考」を高める様々な取り組みをしています。論理的な思考は、的確な判断や表現力、説得力に直結し、人生を幸せにたくましく生き抜くために必要な力です。このコーナーでは、本巢市が実施している「算数・数学甲子園」の過去問をご紹介します。ぜひチャレンジしてください!

Question

下の図のように重なった4つの円があります。区切られた部分A~Hに1~5までの数を入れて、どの円内の合計も14になるようにします。A~Hにどんな数を入れたらよいか答えましょう。ただし、同じ数を何回使ってもよいです。

第26回(2023年)出題



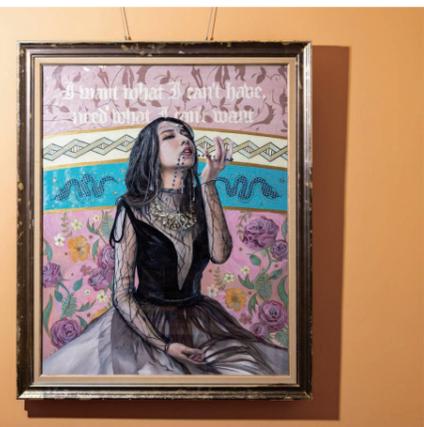
(例) $A+B+C+3=14$

答えは
市HPをチェック!



ふるさとで育まれた感性で“命を吹き込む”絵を描く。

瞳の輝きや肌の質感まで綿密に描き込まれ、見つめていると今にも瞬きをしそうなリアルで豊かな表情。本巢市出身の独学画家・あおいけいさんが描く人物画は写実的でありながらも、その奥に描かれる人への深い愛情が感じられます。物心ついた頃から絵を描くのが好きだったあおいさん。保育園の頃からまつ毛の一本一本まで忠実に表現した目の絵をよく描いていたといいます。「絵を描くと家族や友達が褒めてくれたり、私にも描いて」と頼んでくれて、もっと上手になりたい、という思いから写実を追求するようになりました。特に、人の顔は線が1ミリずれただけで表情が変わってしまう繊密さが面白くて、ずっと人を描いていました。高校卒業後は結婚を機に本巢市を離れます。子どもが産まれると日々の忙しさに追われて絵から離れてしまいましたが、距離を置いたことでかえって自身にとって絵を描くことがとても大切なことだと気づき、再び絵を描き始めます。



似顔絵の依頼を受けながら自身の作品づくりを行ううちに、あおいさんは一つの課題に直面します。目に見えるものを忠実に描くことを得意とする一方で、写真のような絵の次の段階に進まなければいけないと感じたのです。写真ではなく絵にしかできない表現を試行錯誤していたところ、日々の生活の中にヒントを得ます。「息子の写真をスマートフォンで撮影した時、実際よりも可愛さが半減しているような気がしたんです」。肉眼で見る時の感動や愛おしさを絵で表現するには、見たまま以上の「何か」を描かなければいけません。そして、その何かとは、宇宙の長い歴史の中で、この一瞬に輝く「命」の尊さなのではないか。そんな気づきを経て、2019年ごろから「絵に命を吹き込む」をテーマにした作品づくりを始めます。こうして2021年に作品『命吹-いぶき』が誕生。同年にはその名をタイトルに冠した、自身初となる個展の開催を果たしました。



PROFILE

本巢市出身。「絵に命を吹き込む」をテーマに制作を行う。2021年に自身初の個展『命吹-いぶき-』を開催。作品『時はゆるやかに』がSNSで話題となり、一躍有名に。2022年に個展『命吹II』、『覗く』、グループ展『8人の時間』を開催するほか、ドバイ、パリのアートフェアに出品し、国内外に活躍の場を広げる。2024年3月に個展『feel』を開催。

<https://maleraoik.jimdofree.com/>

X @abspko

@aoi_k_29



DATA

(チクマ養蜂・直売所)
岐阜県本巢市木知原591
TEL.0581-32-5888
<https://www.chikumayouhou.com/>
@chikumayouhou



祖父と父から継いだ「山の味」を守る

本巢市木知原で「チクマ養蜂」を営む筑間美穂さんと可児優さん。ミツバチの飼育や貸し出しから、採蜜、はちみつのはちみつ瓶詰め、販売まですべてを姉妹で協力して行っています。根尾川のほとりにある実家の庭には、ミツバチたちが暮らす巣箱がずらりと並んでいます。

実はチクマ養蜂は、1984年頃に祖父の筑間仁一さんが美味しいはちみつが食べたいと、知人の養蜂家に教わって庭に巣箱を置いたことが始まりでした。趣味で始めたはずの養蜂でしたが、次第に巣箱の数は増えていき、やがて、仁一さんを手伝っていた父の孝成さんもそれを受け継いで、専業養蜂家になることを決意。多くの蜂をかかえ、自宅から車で1時間近くの山奥にまで巣箱を運んで採蜜をするように。福井県との県境にある人里離れた手付かずの自然の中、推定樹齢360年を数えるトチの巨木が自生する場所です。採れるトチ蜜は、2018年の農林水産大臣賞のほか、数々の賞を受賞しています。

「私たちは子どもの頃から庭にミツバチが飛んでいるのが当たり前で、ずっとミツバチと「共存」して生きてきたね」と優さん。ところが、2009年春に孝成さんが事故で急逝。二人は思いがけず、チクマ養蜂の今後をどうするか即断を迫られ、祖父や父が残してくれたはちみつを守りたい一心で、家業を継

ぐことを決めます。「子どもの頃から父の仕事を手伝ってはいましたが、養蜂家としては、まったく一からのスタート。わからないことばかりで、とにかく周りの養蜂家の方々に教えてもらって」と、美穂さんは当時を振り返ります。「でも養蜂の仕事は1年で覚えられるものでもないし、むしろ何年経ても積んでも、その年によって雨の降り方も温度も違って、毎年、一年生なんです」。

春先の百花蜜に始まり、4月のさくら、5月のれんげ、トチ…。本巢市の野や山を飛び交い、ミツバチたちが集めたはちみつは、軽やかな花の香りがしたり、優しい甘みが広がったり、ねっとり濃厚だったり、あっさりしているが余韻があったりと、それぞれが個性的。同じ本巢市近郊で採れたはちみつなのに、これほど色も香りも味わいも違うのかと驚きます。中でも、祖父や父が「山の味がする」と愛したトチ蜜は、チクマ養蜂を代表するはちみつ。今では森林の伐採などでトチが減り、全国でも希少となったトチ蜜は、淡く美しい黄金色に輝き、さらりとなめらか。樹木らしいコクと上品な甘さに魅了されます。「はちみつを食べると、しあわせホルモンが分泌されるんですよ」と嬉しそうに笑う美穂さんと優さん。二人はこれからも、本巢市の自然の恵みが詰まったはちみつと一緒に、しあわせを届けていきます。

